

第10回 高浜市子ども貧困対策会議 議事録要旨

日 時：令和5年3月24日（金）

13：30～15：30

場 所：高浜市いきいき広場

2階 いきいきホール

次 第

※ 開会

子ども貧困対策会議は平成27年度より立ち上げ、貧困の連鎖の防止に關していただいたご意見を学習等支援事業にも反映し、一定の成果を得た。次年度、子ども未来部にて子ども子育て支援事業計画の策定が予定されており、貧困対策部門の検討がされる。また、国の子ども家庭庁の創設に伴い、本市でも令和6年度より子ども家庭センターの開設を予定し、子どもの課題を包括的に捉え、対策や支援を行っていくことになる。よって、福祉部による子ども貧困対策会議については、今会議を以って一旦終了とする。会議としては一旦終了となるが、学習等支援事業は継続される。

※ 議事

1. 第9回会議の議論を踏まえた対応等について

資料2に記載の事項について、それぞれ意見交換がされた。主な発言の内容は、以下のとおり。

(1) 進路状況調査について

- 中退者の対応については、本人の意向を聞き取り、インターンシップを入れるなど正規雇用に向けた支援ができればよい。
- 中退者が仮に復学したとしても、いずれは就職活動をしなければならないので、正規雇用に向けた手厚い就労支援が必要になってくる。
- 就職活動の支援について、学習等支援事業の中でこういった支援を行っているのか。
- キャリアカウンセリングを取り入れており、カウンセラーを中心にヒアリングをし、子ども健全育成支援員の力も借りながら、就職に向けて動いている。学習等支援事業の中だけで就職の支援というのは限界があるため、市や外部機関と連携しながら動いている。
- 学習等支援事業に関わっていれば、就職活動の支援ができているということである。そういう意味では、中学校卒業後に事業に繋がっていない子どもとどう繋がっていくかが今後の課題といえるかもしれない。

(2) 外国にルーツを持つ子どもたちの現状及び対応状況について

- 多文化共生コミュニティセンターがあり、高浜市では外国にルーツのある方の支援が始まっている。会議の前に立ち寄ってお話を伺った。日本語指導を頑張っている様子がみられたが、日本語教室が十分かどうかはもう少し議論をする必要性があるのではないかと感じた。外国にルーツのある子どもの支援においては、多文化共生コミュニティセンターとも連携を密にしてい

ただくようお願いしたい。

- 学校の先生との話では、日本語が十分でない子どもが就職活動をするとき、日本語力の問題からインターンシップや就職が上手くいかないということが起きる。ステップを利用している外国にルーツを持つ子どもに日本語力をアセスメントし、漢字が書けるか、テストの問題文は理解できるかなど、レベルにあった支援ができるとよい。
- 外国にルーツをもつ子どもたちの日本語教育において、日常会話は比較的早く習得できるが、学習言語の日本語の習得にかなり困難がある。そのため、宿題がかなりつらい作業になりドロップアウトにも繋がってくる。
- 小学校、中学校段階では日本語指導教室があるので、日常会話から教科に関することも含めて指導することができる。アセスメントと言う話があったが、小学校段階でこれぐらいのレベル、中学校段階はこれぐらいのレベルを個々のカルテを作るわけではないが、ステップとも連携しながら行っていけるとよい。
- 昨年度、日本語の指導をどうするか、専門の団体から研修を受けた。その講師から聞いた話で、なぜ子どもの日本語が上手にならないかという、母国語が通用する友達とずっと一緒にいるということがあり、彼らの中に、この日本で生きていくのだという覚悟のようなものがなかなか芽生えていかないと問題があるということだった。場合によっては母国語でのキャリアアカウンティングも必要になってくる。
- 今、定時制高等学校は入りにくくなっており、通信制高等学校が外国にルーツを持つ学生の受け皿のようになっている。しかし、日本語を読んだり書いたりする機会がないと日本語が身につかないので、ドロップアウトしてしまうという場合が多くある。日常的な学習の場をどのように整備していくのが大事になってくる。

(3) 子ども食堂の成果について

- ステップ・ジュニアのアンケートで、ステップ・ジュニアに昼食があってよかったと思う子どもの割合が、元年以降下がっているのは、昼食については、コロナ禍になって黙食となり、みんなで食べていても喜びを感じられないということもあって下がっていると考えられる。今後、黙食などの規制が緩和されれば、喜びが戻り数字も変わってくるのではないかと期待している。
- 評価の仕方について、このように書いてしまうと、昼食支援の価値が下がったかのように見えてしまう。毎年、昼食支援がよかったと思っている子どもはいるし、地域の方々の温かい気持ちで支えられながらできていることなので、割合で評価してそれが減少しているという分析は違うのではないか。保護者のアンケートの結果では、ご飯を食べさせることができないからではなく、誰かと一緒に食べさせたいということがある。この辺りを分析に入れるとよい。
- 昼食支援が正しく評価できるように工夫していきたい。
- 年度の終わりに、昼食支援をやっていただいている方に子どもから感謝を伝える行事は既に実施されていたと思う。食事の提供だけではなくて、ボランティアの人たちと触れ合う中で社会性を身に付ける、これは学習等支援事業と子ども食堂を連携させていることの大事な目的である。単によかったと思うという評価ではなく、評価の軸はもう少し多様であって欲しい。また子どもたちの感謝の言葉があれば記録して、共有できるとよい。

- 毎食ごとに、子どもたちは「ありがとうカード」に感想を書いている。ファイリングしてクッキングスタジオに置いてあり、昼食支援のボランティアが次回来たときに見ることができる。またクリスマス感謝祭を開催して、直接感謝を伝える行事もある。
- 参加者の数、ありがとうカードを書いた数、ボランティアに関わった人数、シンプルではあるが、そういったものを積み上げていけば評価に繋がっていくのではないかと感じる。特にボランティアに関わった人数は高浜市の温かさを示す数字そのものとなる。

2. 子ども健全育成支援員の活動実績（資料3）

資料3に記載の事項について、それぞれ意見交換がされた。主な発言の内容は、以下のとおり。

- ステップで関わりのある子どもについては、ステップに来ているときに相談ができています。子どもが直接相談できる場があるのはよいことであるが、本人が直接相談するにはハードルが高いと感じる。令和3年度は本人からの相談者が8人いたが、令和4年度は減っている。その原因は何か分かるか。
- 令和3年度の相談者8人もほとんどがステップに関わっている子どもの相談である。令和4年度と比較して減っているのは、偶然、相談数が減ったのではないかと考える。
- 本人からの相談はなかなかハードルが高いということだが、高浜市は様々な相談員を配置している。子ども健全育成支援員以外にも、スクールソーシャルワーカーや母子父子自立支援員、家庭児童相談員など。そういった支援員が網目のように広がり、そこに引っかかってくるような体制となっている。
- 子どもは、子ども健全育成支援員がいることを知っているか。また周知を行っているか。
- 小中学生には、子ども健全育成支援員はあまり知られていないかもしれない。しかし、学校関係者については、普段から顔の見える関係を築いており連携を強固にしている。学校で気になる子どもがいれば、直接支援の依頼が子ども健全育成支援員に来ることもある。
- 学校とは連携ができていと感じる。子ども自身が声をあげられるような環境があればよい。子ども健全育成支援員の周知を行い、いつでも相談できる体制を考えていただきたい。

3. 「ステップ」「ステップ・ジュニア」の活動実績

（1）成果指標（資料4）

（2）令和3年度、令和4年度の活動実績（資料5）

（3）学習等支援事業8年間の歩み（ステップ利用者の体験談）（資料6）

資料4、5、6に記載の事項について、それぞれ意見交換がされた。主な発言の内容は、以下のとおり。

- 対談を聞いて、この事業の成果があったのだと感じる。成果指標の設定について、事業が始まったときから変わっていない指標もあると思う。改めてこの指標を見ると、学習等支援事業の努力で評価が変わるものと事業の努力ではどうにもならないものが混在している。高浜市のよいところは、学校関係との連携がうまくいっているところであり、これも評価に値するのではないかと感じる。この成果指標を作った当時は、まだ事業がどう働いて行くのか分からなかった。事業を始めると、こういった成果が見えるのではないかと指標を作った経緯もある。指標の見直しは絶えず必要かと感じた。事業の努力がもっと成果指標に表れるようにした方がやりがいもある

るのではないかと思う。

- 成果指標について、参加率はもう少し出し方を工夫できるのではないか。子どもたちが自分の意思で参加しようと思える日数の中で数字を出していけば、もっとよい評価になると思う。
- 子どもに対するアンケートで「事業を通して成長したと思うか」という問いに対し、成長したと思うという回答が前年度と比較すると数値がかなり上がっている。保護者の回答でも、子どもが成長したと感じている割合が増えている。子どもが成長を実感しているということは素晴らしい。これが上がってきた理由は何か分かるか。
- 一つはコロナの状況が多少落ち着いてきたことが考えられる。グループワークや振り返りなど会話が増えたことが大きい。サポーターと関わるなかで、「こういったことができるようになった」という会話や、講座の振り返りでアウトプットする機会が前年度と比較すると増えたためではないか。
- 立ち上げのとき、子ども健全育成支援員がまめに学校に来てくださった。子どものことをよく見られていて、学校に子どもの様子を伝えてくださった。また、貧困ではないが、不登校の子どもが事業の対象になるかなどの相談にも乗ってくれた。これが今でも続いている。今では担任とアスクネットや子ども健全育成支援員とのやり取りもある。当時の支援員は子どもの様子を記した紙を渡すだけでなく、直接来て話をしてくれた。それでステップのよさもわかった。
- 現在は学校との直接的なやり取りはなくなってしまったか。
- アスクネットとは毎月紙で報告をいただいている。よくやり取りをしている。
- 当時の支援員のように、また学校に行って、直接やり取りをしていただけるとよい。
- 当時の子ども健全育成支援員は教員のOBであって、今の先生方の先輩であるが故に、そういった関係性ができたということもある。現在の子ども健全育成支援員は教員のOBではないが、事業立ち上げ時と同様に対応していただけるのか。
- 今の支援員さんにもとてもお世話になっている。私自身子ども健全育成支援員がいることを知っているの、話を聞いたりお願いしたりしている。子どもが自分で子ども健全育成支援員に相談できるとよいとあったが、教員もいきいき広場には様々な支援員がいることを知れるとよい。私から若い先生たちに、子ども健全育成支援員に相談に乗ってみたいと伝えたい。
- 事業開始から時間が経って、新任の先生の中にはステップというものをご存じない方もみえるのではないか。どういう趣旨で、どのようなことをやっているのかという部分は改めて説明会を開催されるとよい。こども家庭庁が福祉施策も含めて統一されているのも、国の教育施策と福祉施策を連携させたいという方針でもあるので、そういう意味でも説明会などがあるとよい。

4. その他

(1) 子ども食堂支援基金の収支状況報告（資料7）

(2) たかはま子ども食堂の開設及び運営支援について

- 昼食支援のボランティアとして参加させていただいた。子どもの話になかなかついていけないこともあったが、私自身もとても楽しんで参加していた。本当にありがたかった。コロナ禍にあっては、みんなでおしゃべりをしながら食べることができなくなって、少し残念ではあった。
- コロナが落ち着けば、以前のように楽しく食べられる。子ども食堂には高浜市の温かさが詰まっているので、より多くの市民の方にも知っていただけるように取り組んでいただきたい。